
落ちてる手袋を見ると

林羽夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちてる手袋を見ると

【Nコード】

N6996Z

【作者名】

林羽夢

【あらすじ】

道端に落ちていた手袋の裏に隠された、壮大なラブストーリー…
を妄想してみた。そんなお話。

はじめに(前書き)

はじめまして。林羽夢と申します。初投稿です。

皆さんは、道端で手袋を見て何か考えますか？何にも考えないと
いう人、多いんじゃないでしょうか。

これは、そんな皆さんに送る、壮大な妄想で構成された物語です。
私の分身であり、話進行役のハムリンに話してもらいました。

頑張って更新していきます！

はじめに

皆さん、はじめまして。私は、話進行役のハムリンと申します。さて、最近寒くなってきた、外に出る際には防寒具が欠かせませんね。

そういえば、防寒具で思い出したのですが、昨日道端で手袋を見ましたよ。そう、落とし物です。私は元々下を見る人で、昨日も斜め右下を見つめながら歩いていました。そして、ガードレールの足元にポツンと一つ落ちていて、それを見つけたのです。

それは大人用の右手袋でした。どんよりした冬の空気に対抗するような鮮やかな桃色からして、女物でしょうね。それにしても、あれは落とし物にしては綺麗でした。持って帰って使っても良いくらいでしたよ。あ、もちろん拾ってませんがね。右手だけでは使い物にならないでしょう。

しかし、なぜ右手だけ落としただのでしょうか。ポケットに右だけ入れておいて、ふとした瞬間に落としただのでしょうか。それとも子供が親の手袋で悪戯でしょうか。いろいろな意見が飛び交いそうですが、ここでは私が考えた説をご紹介します。

& l t ・妄想開始 & g t ; ニヶ月前の公園で

それは、早くも日が沈み始めた夕方のこと。一人の女が、自慢の腰まで伸びた黒髪を秋風に遊ばせながら、公園のベンチに座っていました。カサカサと、枝から追い出された枯れ葉が音をたてています。

彼女は今、もうすぐ付き合って二年になる男を待っている最中でした。左腕に着けた腕時計は、いつ見ても数秒ずつしか動きません。公園の入り口を見つめても、車しか通りません。女はだんだん不安になってきました。

（このまま来なかったらどうしよう、事故にでもあったんじゃない。いや、急遽来れなくなったのかもしれない。だとしたら、メールが来ているはず。）

女はおもむろに鞆の中から携帯電話を取り出し、開きました。メールが一件入っています。急いで確認すると、携帯の契約会社からの料金通知メールでした。女はイラついたようにクリアボタンを押し、待受画面に戻しました。

待受画面には、自分と彼氏の写真が輝いています。これは丁度、去年の今日に撮った写真でした。彼は写真嫌いな人でしたが、その日は彼女の誕生日ということで、特別にツーショットを許したのです。女はその写真をまじまじと眺めました。一年前の自分は、大好きな桃色のジャケットを着て、黒髪を束ねて頭の上でまとめています。その顔は、はち切れそうなくらい幸せそうでした。一方男は、恥ずかしそうに苦笑いしながら、彼女を左手で抱き寄せています。肌寒い秋に感じた彼のぬくもりは、一生忘れないでしょう。

しばらくして、待受画面を見飽きた女は、携帯から目を離して公

園の入り口を見ました。しかし、写真の中で苦笑するその人は現れません。腕時計を見ると、待ち合わせの時間の遙か三十分後を示していました。

ついに女の不安は最高潮にまで達しました。そこで、手に持った携帯のボタンを慣れた手つきで押し、怒りと不安を込めたメールを最愛の彼に送ったのでした。

意外なことに、メールはすぐに返ってきました。といっても、送ってから十分経った後なのですが。きつと返ってこないと思っていた女からして、この十分は早い方に入るので。

メール文はとても短いものでした。『待たせてごめん、もうすぐ着くよ。』

絵文字のない質素なメールでしたが、寛大なこの女は、ただ彼が無事だったことに満足しました。しかし満足すると同時に、少し不愉快になったことは間違いありません。

こんな大遅刻、何か深いわけがあっても良さそうなものですが、彼女には全く思い当たらないのですから。

それから数分経たずに、彼がいつものぶつきらぼつをぶら下げて公園に入ってきました。

「ごめん、水奈（みな）。待ったよな。」

すまなそうにそう言う彼は、黒いジャンパーにジーパンといった楽な格好をしています。どうやら、着替えに手間取ったのではないようです。

「遅いよ文夜（ふみや）。遅刻しすぎ。心配しちゃったよ。」

決して軽率な様子はない彼女が、文夜の目に映りました。

「じゅめん、本当にじゅめん。」

いくら謝ってみても、彼女、水奈は応じてくれません。

「私がいくら優しくてもね、三十分以上の遅刻は許せないよ。なん
でこんなに遅くなったの。」

静かに怒りを露にする水奈は、困惑する文夜の顔から目線を落と
しました。その時、文夜の手に小さな袋が握られていることに気づ
いたのでした。

淡いピンク色の包装紙が、手のひらより二回りくらい大きく綺麗
にまとまって、赤いリボンを付けています。文夜はそれを、大事そ
うに握っているのです。

桃色のプレゼント

「ごめん水奈。これにはわけがあつて…。」

目線を落とす彼女に、文夜は何度も謝り続けます。例の包装紙は、そんな中でもやはり、大事そうに握られています。

水奈はその包装紙の中身が気になって仕方ありません。許してもいいから、その中身を知りたくまりました。

「わかつた、いいよ文夜。そのわけを説明して。」

このとき水奈は、一つの期待を抱いていましたが、彼の答えはそれの中するものでした。

彼は、手に持ったものを胸の前に出して、照れ臭そうに言いました。

「あの、今日は水奈の誕生日だろ？ 去年は写真だったけど、今年はやっぱりもう少し高価なものがいいと思つて…。」

「そんな、いいのに。」

慌ただしく手をひらつかせる水奈に、文夜も空いている右手を振りしました。

「いや、だって、去年のお前からの誕生日プレゼント、コートだったじゃないか。」

「あれは…まあ、高かつたけど、別に見返りを望んでいる訳じゃないし…。」

口を尖らせる水奈の目の前に、文夜は左手に持った包装紙を差し出しました。問答無用、買ったんだから貰え。ということでしょう。彼からのプレゼントで喜ばないほど、水奈は冷淡な女ではありませんでした。だから、口では遠慮をぶつぶつ言いながらも、手はそれを受け取りました。

「実はそれ、今日買ったんだ。なかなか良いのが見つからなくてさ。」

ベンチに座って包み紙を嬉しそうに抱える彼女を見下ろしながら、文夜は『わけ』を説明しました。

文夜の話をもっと簡単にまとめると、誕生日プレゼントを選んでいたら遅刻した。とのことでした。

「遅くなるなら連絡くれればいいのに。」

なら心配しなかったのに。と再び口を尖らす彼女でしたが、内心では喜んでいました。何せ女心をわかってくれなさそうな仏頂面からの、突然のプレゼントなのですから。いくら遅刻したといえ、不器用な彼が頑張った証というなら水奈には許せるのでした。

しかし表面の水奈しか見えていない文夜は、彼女の言葉に真剣に答えました。少し、その日焼けた頬を紅潮させながら。

「それは、あの、サプライズみたいにしたかったから。」

それを聞いた水奈は、急に可笑しくなりました。プレゼントを抱えながらフフフと笑っていると、文夜の頬はますます赤くなりまし。元々こういった事が苦手な彼は、プレゼントを買う時点からすでに恥ずかしさをこらえていたのです。しかも、せつかくの誕生日

だからと頑張った結果、こうして彼女に笑われてしまったのですから、紅潮しても仕方ありません。

「なんで笑うんだよ。」

「フフツ、だってさ、文夜がこんなこと考えるととは思わなかったんだもん。」

今日のはじめてニコニコ笑う水奈は、もう遅刻のことを忘れていました。

文夜も、そんな彼女を見てホツと胸を撫で下ろし、その隣に腰を落착かせるのでした。

「ねえ文夜。開けてもいいかなあ。」

ひとしきり笑ってすっかり機嫌が直った水奈は、ワクワクしながら文夜を見ました。頬の色が戻っている文夜はただ、コクリとうなずきました。

水奈はそれを見ると、すぐに包みに手をかけました。丁寧に、丁寧に、決して破いてはいけません。包装紙は水奈の手によって、綺麗にゆつくりと開かれていきました。文夜も、その様子を横から見守っています。気に入ってくれるかが問題なのです。

やがて、包み紙の中から露になった物を見て、水奈の顔が輝きました。それは、水奈の大好きな桃色の手袋でした。

「バイトの時給では、これが精一杯だったんだよ。」

手にはめてみてぴったり合うことを確認している彼女に、文夜はすまなそうに言いました。

現在二人は大学生で、文夜の方が一つ上です。そんな彼の収入源は、コンビニのバイトの少ない時給でした。

「十分だよ。ありがとう！」

彼のそんな事情を知る彼女は、嘘偽りない笑顔を彼に送り返すのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6996z/>

落ちてる手袋を見ると

2011年12月24日09時49分発行